

展示物状況

令和6年1月現在の展示物状況です。

【河井弥八記念館】は、平成24年4月、郷土の誇りである二人「河井重蔵」「河井弥八」を、末永く南郷区民で顕彰するために設立されました。

出来るだけ多数の方のご来館をお待ちしております。

開館日 土曜・日曜日 10:00~15:00 …コロナ感染が収束するまで、日曜日みの開館（R3年7月~継続中）



記念館看板 『河井弥八記念館』

書家：平野一夫

彫師：松田富行（長野県安曇野市在住）

河井家12代当主 河井修氏の親族



河井弥八翁胸像（木製）

制作者：守屋幾久夫

（南郷報徳の会寄贈）



大礼服姿の河井弥八

昭和11年1月3日

（河井家蔵）



御紋附銀花瓶 一对

天皇、皇后両陛下下よりの下賜品

河井皇后宮太夫に対して

（掛川市蔵）



御紋附蒔絵手箱

天皇、皇后、皇太后三陛下よりの下賜品
元帝室会計審査局長官河井弥八に対して
昭和9年頃か

(掛川市蔵)



昭和天皇(裕仁)直筆署名の証書

『勲一等旭日桐花大綬章』授与証書

昭和35年7月21日 河井弥八死去に伴い授与されたもの。

日本国憲法施行後は、戦没者叙勲と外国人受賞者を除き62人が受賞されている。

現在、旭日桐花大綬章の現物が残っていないのが残念である。

(掛川市教育委員会 蔵)



河井弥八のレリーフ

河井弥八は、広く全国の砂防事業に関わった人である。全国砂防協会の副会長も務め、災害時には被災地を訪ね、現状をつぶさに視察され、県や国に予算措置や対策を進言した。

全国治水砂防協会では、砂防事業に貢献した河井弥八のレリーフを砂防会館本館一階ロビーに飾り、永く顕彰していた。

しかし、本館を建て替えることになり(H30年5月竣工)この際レリーフを関係する団体や地元へ寄贈することにした。

こうして、平成30年12月に河井弥八記念館に払い下げられた。

河井彌八は、砂防協会では、五賢人(功労)の一人と称されている。

レリーフの概要(銅板製)

- ・縦 66.6cm
- ・横 55.7cm
- ・奥行 7.0cm
- ・重さ 16.7kg

(製作者:清水多嘉示 文化功労者、芸術院会員 昭和56年没)



帝国議会議事堂竣工記念品

河井弥八も関わった現国会議事堂が竣工した
昭和11年11月7日竣工

(河井家蔵)



蝶の舞姫人形

この気品に満ちた可愛らしい人形は、昭和天皇・香淳皇后の第一皇女（今生天皇、常陸宮正仁親王の長姉）に当たる照宮成子内親王（てるのみやしげこないしんのう）の愛好していたものである。箱の裏側に、照宮成子内親王のお印である「紅梅」の文字が書かれている。

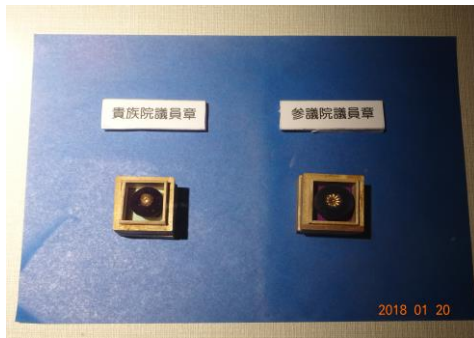
蝶の舞姫人形が、河井弥八に、照宮成子内親王より下賜されたことが『昭和初期の天皇と宮中・侍従次長河井弥八日記』第6巻、昭和7年9月17日の条に記されている。

それによると「…略…照宮殿下（成子内親王）に拝謁す。殿下より蝶舞人形一対及び御手筈を賜る。」とある。

河井弥八は、昭和2年侍従長兼皇后宮太夫を拝命してから昭和7年に至るまで、皇后や呉竹寮でお住まいの内親王たちのお世話をしてきた。特に、内親王の養育についての責任者であった事もあり、皇室会計審査局長官へ転任に際して、ご挨拶に伺った。その折、照宮殿下より、愛好していた人形をお礼として河井弥八に贈られた。

宮中では、自分の愛用品をこのような離別の時に、親しい人や世話になった人に下賜する習慣があるという。

(河井家蔵)



『貴族院議員章』 『参議院議員章』

終戦で貴族院は廃止され、新たに参議院が設立された。
(昭和22年に第1回参議院議員選挙実施)

現存する「貴族院議員章」は数少ないと言われている。



象牙の『一牙彫 水仙』

旧河井家の所蔵品のなかでも、際立って精巧な工芸品がある。象牙を細工した彫り物で、収納されていた箱書きには『一牙彫 水仙』とある。

水仙の葉のなめらかな曲線、花のかれんさが見事に表現されている。普段は見えない根の部分は、無数の細かい根がそれぞれの方向に広がっている様子まで繊細に加工されている。

『一牙彫 水仙』の入手の謂われは分からないが、根の底の部分には「宮務」と書かれていることから、河井弥八が宮内省に勤めていた関係で、何らかの記念品として頂いたものだろうか。



河井弥八日記

「河井弥八日記」は弥八氏が帝大在学中の明治35年から死去した昭和35年までのものが確認され（一部欠落あり）、議会官僚・宮廷人・議員（貴族院、参議院）としての弥八氏の日記は、戦前・戦後の憲政の発達を裏面から明らかにする貴重な史料となっている。

《昭和初期の天皇と宮中・侍従次長河井弥八日記》

全6巻 岩波書店 大正15年から昭和7年まで 発行

《河井弥八日記戦後篇》…河井家文書研究会

全5巻 信山社 昭和20年から昭和35年の翻刻

(第5巻 令和2年12月発行)

《河井弥八日記》…河井重蔵・弥八研究会

1940年（昭和15年）、1941年（昭和16年）

1942年（昭和17年）、1952年（昭和27年）



修身帳

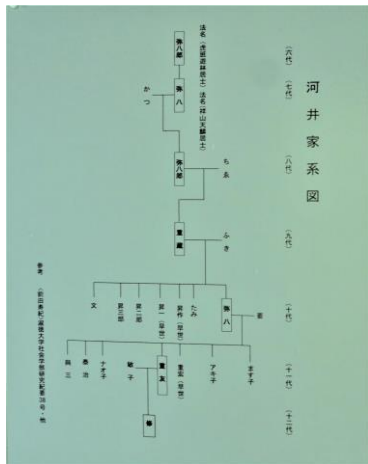
河井弥八が掛川高等小学校2年の時（明治23年）、
「教育勅語」が発布され、全国すべての学校で教えら
れることになった。河井弥八は「聖勅」として、これを
書き写している。（掛川市教育委員会蔵）

唱歌帳

河井弥八の掛川高等小学校3年の時（明治24年）の唱歌
帳。歌の題名は「五倫ノ歌」「誠ハ人ノ道」等、道徳的
な内容。数字は、音階に相当するものか？
（掛川市教育委員会蔵）

算術筆記

筆記帳の年代は不明だが、掛川高等小学校か、静岡尋常
中学校時代のものと思われる。設問に対して、それに
解法を示している。（掛川市教育委員会蔵）



河井家系図

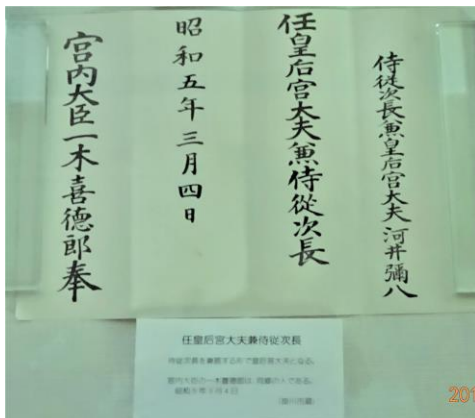
- 八代目：弥八郎
- 九代目：重蔵
- 十代目：弥八
- 十一代目：重友
- 十二代目：修



家族写真

後列 三女ナオ子、長女マス子、長男重友
前列 次男泰治、次女アキ子、弥八、三男興三、弥八夫人要
三男三女に恵まれる
昭和16年

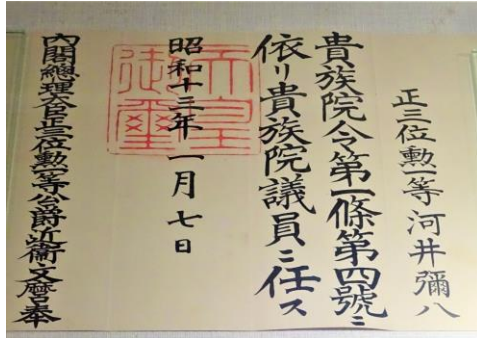
（河井家蔵）



任皇后宮太夫兼侍従次長

侍従次長を兼務する形で皇后宮太夫となる
宮内大臣の一木喜徳郎は、同郷の人である
昭和5年3月4日

（掛川市蔵）



辞令 『貴族院議員辞令』

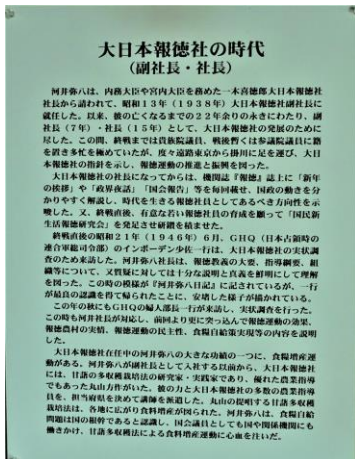
河井弥八は皇室会計審査局長官を辞した後
昭和13年1月7日貴族院議員に転身する。

(掛川市 (掛川市 所蔵)



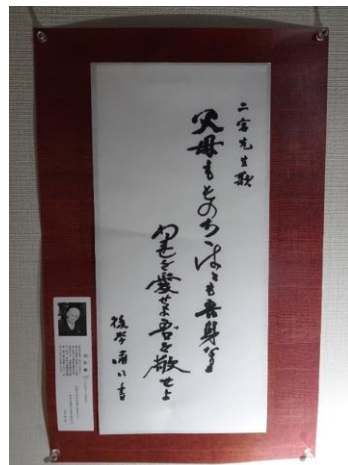
参議院議長室の河井弥八

(河井家蔵)



大日本報徳社の時代 (副社長・社長)

昭和13年：4代目社長の一木喜徳郎に請われて副社長になる
昭和20年：5代目社長になる（亡くなる昭和35年まで）
終戦直後「国民新生活報徳研究会」を発足
昭和21年GHQの来訪にたいし対応（大日本報徳社の内容を説明し理解を得られた）
甘藷多収模法による食料増産運動に心血を注いだ（丸山方作の力と農業指導員を各地に講師として派遣し、戦前・戦後の食料増産が図られた）



二宮先生歌

父母もそのちちはも吾身なり
われを愛せよ吾を敬せよ

彌八書



河井弥八愛用の杖

袴田銀蔵氏が譲り受けたものを提供

河井弥八愛用のゴルフクラブ

昭和5、6年の河井弥八日記には、度々ゴルフの事が登場する。側近として、天皇后のお供のためゴルフをする機会があった。そのために、腕を上げるため練習に通った。
(館林家 寄贈)

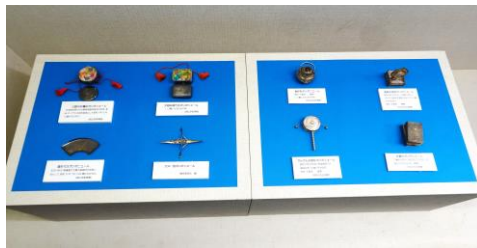


松崎慊堂銘の盃

この盃は山崎徳次郎から明治二十年ころ、河井重蔵に贈られたことが、収納箱の箱書に記されている。徳次郎は、十王町松ヶ岡の当主、山崎千三郎(事業家・政治家)の兄である。

盃には、掛川藩主太田資俊に招かれて掛川藩校の教授となつた松崎慊堂の「厩思也再斯可」の銘がある。(酒は飲み過ぎないように、二杯程度がちょうどよい)の意か。

※出典 「再斯可」論語公治長第五-20
(掛川市蔵)



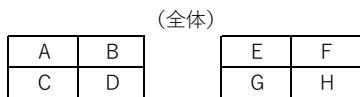
ボンボニエールとは

元々はフランス語で菓子を入れる器の意味を表す。フランスやイタリアでは子どもの誕生日や結婚式などに菓子を配る風習がある。

日本では明治中期から、皇室でこれを取り入れ、慶事に行われる晩さん会、正餐会などの引出物として、招待者全員に配られた。名前はそのまま「ボンボニエール」とし、中身の菓子は金平糖である。大きさは手の平に乗る程のものである。

昭和初期までのものは、銀製で繊細な金工技法を施したものが多く作られ、そのデザインは皇室・皇族の意向を反映して多彩である。

この引出物の習慣は、今の皇室にも引き継がれている。河井弥八も折々の機会にいただいている。



(A)

(B)

(A) 『三脚円形楕円形ボンボニエール』

日本統治時代の大韓帝国皇帝高宗の五男 李ぐう(りぐう)の成年記念として昭和7年12月に贈られたもの。
(朝比奈家 寄贈)

(B) 『文箱形桐竹文ボンボニエール』

いつ戴いたものか不明
(朝比奈家 寄贈)



(C)



(D)

(C) 『扇形竹文ボンビニエール』

北白川和子・東園基文字爵の結婚式のお祝い品として
昭和10年1月7日に贈られたもの。

(朝比奈家 寄贈)

(D) 『カヌー型ボンビニエール』

(掛川教育委員会 蔵)



(E)



(F)

(E) 『香炉形ボンビニエール』

家紋 天皇家 銀製
いつ戴いたものか不明。

(河井正志氏 寄贈)

(F) 『雅楽太鼓形ボンビニエール』

昭和3年11月17日、2日間に亘って行われた昭和
天皇即位時の大礼の宴の引き出物。

家紋 天皇家 銀製

(河井正志氏 寄贈)



(G)



(H)

(G) 『でんでん太鼓形ボンビニエール』

昭和10年12月5日、常陸宮殿下の御誕生祝いの宴の
引き出物。

家紋 天皇家 銀製

(河井正志氏 寄贈)

(H) 『洋書形ボンビニエール』

久邇宮邦英王の御成年式のお祝い品。

昭和5年5月26日 銀製

(河井正志氏 寄贈)



儀式用正装姿の河井弥八

貴族院書記官長時代

(館林家蔵)



第8回国土緑化大会での植樹

天皇后を迎えて、第8回国土緑化大会が岐阜県揖斐郡
谷汲村で行われた。その記念行事として植樹が行われ、国土
緑化推進委員会顧問の河井弥八は、天皇后の植樹の介添え
を行った。 両陛下はそれぞれスギ3本を植えられた。

昭和32年4月7日

(岐阜県庁 提供)



甘藷競産会



河井家も甘藷の収穫

甘藷競産会（品評会）

丸山方作氏の多収穫栽培法による甘藷の栽培が各地の甘藷競産会として行われた。（大村家蔵）

河井家も甘藷の収穫

河井弥八（ステッキの人）、奥さん左から3人目（座っている人）、その左右間たみ（弥八氏の妹）、左端小柳直吉 右手奥、木々に囲まれる河井邸、その右前山 昭和19年頃 （神谷家蔵）



展示会に出陳した甘藷



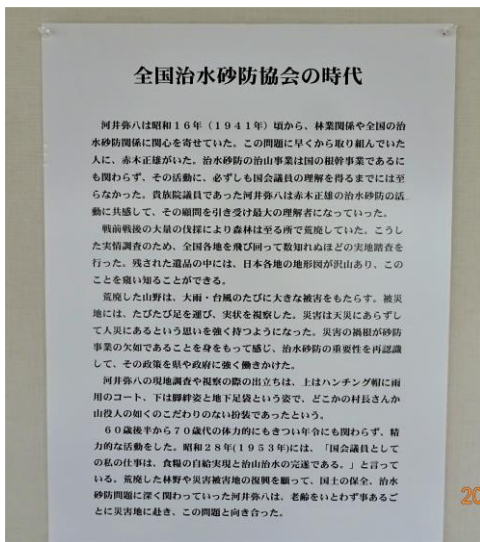
甘藷栽培図

展示会に出陳した甘藷

1株の収穫 十二貫百匁（45.375kg） 河井弥八の名で出陳している。（掛川市蔵）

甘藷栽培図

大日本報徳社専任農事講師の小柳直吉が、全国各地に赴いて甘藷多収穫栽培法を指導した時、使用した掲示物。（複写）（小柳家蔵）



全国治水砂防協会の時代

河井弥八は昭和16年（1941年）頃から、林業関係や全国の治水砂防関係に関心を寄せていた。この問題に早くから取り組んでいた人に、赤木正雄がいた。治水砂防の治山事業は国の根幹事業であるにも関わらず、その活動に、必ずしも国会議員の理解を得るまでには至らなかった。貴族院議員であった河井弥八は赤木正雄の治水砂防の活動に共感して、その顧問を引き受け最大の理解者になっていった。

戦前戦後の大量の伐採により森林は至る所で荒廃していた。こうした実情調査のため、全国各地を飛び回って数知れぬほどの実地踏査を行った。残された遺品の中には、日本各地の地形図が沢山あり、このことを窺い知ることができる。

荒廃した山野は、大雨・台風のたびに大きな被害をもたらす。被災地には、たびたび足を運び、実状を視察した。災害は天災にあらずして人災にあるという思いを強く持つようになった。災害の禍根が砂防事業の欠如であることを身をもって感じ、治水砂防の重要性を再認識して、その政策を県や政府に強く働きかけた。

河井弥八の現地調査や視察の際の出立ちは、上はハンチング帽に雨用のコート、下は脚絆姿と地下足袋という姿で、どこかの村長さんか山役人の如くのごだわりのない格好であったという。

60歳後半から70歳代の体力的にもきつい年齢にも関わらず、精力的な活動をした。昭和28年（1953年）には、「国会議員としての私の仕事は、食糧の自給実現と治山治水の完遂である。」と言っている。荒廃した林野や災害被害地の復興を願って、国土の保全、治水砂防問題に深く関わっていった河井弥八は、老齢をいわず事あるごとに災害地に赴き、この問題と向き合った。

全国治水砂防協会の時代

昭和17年：全国治水砂防協会顧問となる
昭和22年： 〃 理事長となる
昭和31年： 〃 副会長となる

貴族議員であった河井弥八は赤木正雄の治水砂防の活動に共感して、その顧問を引き受け最大の理解者になっていった。

昭和28年には、「国会議員としての私の仕事は、食糧の自給実現と治山治水の完遂である。」と言っている。

荒廃していた森林の実態調査のため、全国各地を飛び回ってその政策を県や政府に強く働きかけた。



砂防会館の至宝

砂防会館一階ロビーに、銅板製の河井彌八像が飾られている。河井彌八は、砂防協会では、五賢人（功労）の一人と称されている。

（社）全国治水砂防協会 寄贈



『有備則無患』碑と河井彌八

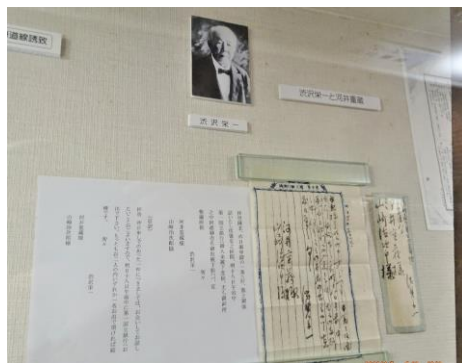
中川根村徳山（現、川根本町徳山）には、村の東西を流れる桃沢川があり、大雨の度に氾濫を繰り返し、村はその度に甚大な被害を蒙っていた。何とかして桃沢川に砂防堰堤をと、郡に陳情を重ねたが目的は達せられなかった。

昭和24年の秋、全国治水砂防協会の理事長である河井弥八は単独で、脚絆地下足袋姿で訪れ、つぶさに現地を視察された。「この事態は一刻も猶予ならず」と県当局や建設省に、砂防堰堤の建設を進言された。

この事があって、昭和25年着工、31年には砂防堰堤が完成した。その後の狩野川台風や伊勢湾台風などでも被害が出ず、河井弥八の治山治水への熱い情熱を感じ、迅速なる処置に村民は深く感謝した。この感謝の気持ちが頌徳碑建設へと高まり、「河井弥八翁頌徳碑」の揮毫をお願いした処、個人の賞讃となることを喜ばれず、その代り「有備則無患」と揮毫された。

昭和35年護岸工事の完成に伴い、感謝の記念碑落成式にご出席をお願いしたが病で出席叶わず、この年河井弥八は亡くなられた。

参考：河井弥八先生追悼誌



書状 渋沢栄一より

明治21年12月17日、渋沢栄一より、河井重蔵・山崎治次郎宛に出された書状。

(内容)

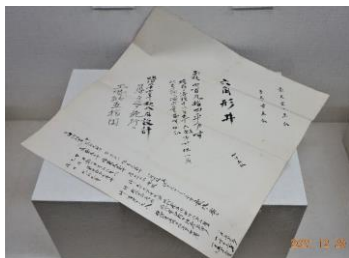
お会いしてお話したいことがございますので、第一国立銀行へお出で下さい。という内容



（今も残る旧河井邸『六角井戸』）



『六角井戸』の内部



『六角井戸』の図面

珍しい旧河井邸の『六角井戸』

『六角井戸』は、現南郷地域学習センター第一駐車場南に現存する。この井戸は、明治27年離れ座敷（弥八庵）の建造と同じ時期に造られたものである。

井戸は一般的には、円形、四角形のものが多く見られるが、全国には五角形、六角形、八角形の井戸もある。

井戸調査をしている立正大学河野忠教授によれば、五角井戸は平成22年現在では6ヶ所、六角井戸は52ヶ所（静岡県には河井邸以外に1ヶ所）、八角井戸は14ヶ所あるといわれる。

河井重蔵は多方面に興味・感心を持たれていた方で、井戸の形の面白さに魅せられて、珍しい井戸（六角井戸）を造ったと思われる。

【当HP 河井弥八詳細 No.30】を参照して下さい。



御大札記念の六角皿

昭和三年十一月十日、皇太子であった裕仁（ひろひと）殿下は、大正天皇崩御により、天皇即位礼を挙行し、第124代の天皇に即位した。

この即位の礼は京都御所で、国民祝意のうち行われた。この即位礼を大札（たいれい）、大典（たいてん）といい、一般人は御大典（ごたいてん）と称した。

当時河井弥八は、宮内省の侍従次長の職にあり、この即位礼（式）には深いかかりを持ち、大札準備委員を前年の六月二十日に仰せつけられた。他の多くの関係者と共に準備万端整え、つつがなく即位礼（式）を執り行うことができた。

これを記念して、関係者連名でこの大札六角皿を作製した。河井弥八を中心に据え、順不動の寄せ書きにしたものである。

宮内大臣の一木喜徳郎氏（大日本報徳社社長の経験者）の名も見える。

（河井正志氏寄贈）



伊万里焼の蓋付き飯茶碗

この伊万里焼の蓋付き飯茶碗の入手由来が興味深い。茶碗の入っていた箱書きには、河井重蔵の手で「慶応年間、掛川藩家老太田綾部氏、転国ノ際、売却セルモノヲ購入シタルモノナリ、而シテ、氏上総へ行ケリ」と書かれている。

大政奉還後、十五代徳川慶喜は新政府から、駿河・遠江・三河の一部を含めた70万石の所領を与えられた。それがため、今まで所領していた沼津藩、田中藩、小嶋藩、相良藩、横須賀藩、掛川藩、浜松藩の諸藩は、命を受けて、ござって上総

（千葉県）の各地へ転封を余儀なくされた。

掛川藩家老太田綾部も、城主に従って上総松尾藩の地へ移転するため、最低限の物以外の家財は、処分しなければならなかった。こうした中、河井家が手にいれたのが、この品物である。

飯茶碗の九個のほとんどが、金継ぎ（破損補修）されたものである。地震か何かで破損したにも関わらず、よほど気に入ったものか、金継までして大事にしていたことが窺える。

（掛川市蔵）

河井重蔵 コーナー



<河井 重蔵>

河井重蔵（河井弥八の父）

河井重蔵は安政元年（1854）弥八郎の長男として誕生。没年は大正14年（1925）（71歳）

庄屋格の河井家9代を継いだ河井重蔵は、早くして家督を継ぎ、14歳で上張村の組頭を、19歳で上張村の戸長となる。若い頃から公共の事に志し、以後、佐野郡城東郡村連合会議員、南郷村会議員、所得税調査委員、徴兵参事委員、県会議員（3回）、衆議院議員（3回）に当選し、地方並びに国政に関与した。

河井重蔵は、村や地方の発展には並々ならぬ努力を惜しまなかった。その幾つかを挙げると

①板沢山御料林の払下げに努力する。

明治5年、板沢山御料林（現在の財産区管理地）の払下げを、当時地租改正事務局総裁の大久保利通に請願した。以後度々申請したが、許可が下りるまでに51年間の歳月を要した。



<掛川銀行創設>

②掛川銀行創設に加わる。

明治政府の殖産興業政策を担うものとして、岡田良一郎を中心にして地方の資産家が出資して、明治13年に資本金30万円の掛川銀行を創設した。河井重蔵も賛同者の一人として5,000円を出資して、これに加わった。主として茶の振興のための融資、為替、輸出の便を図ることを業務とし、地域振興に寄与した。明治26年には頭取に就き、業務のいっそうの拡大に努力した。



<東海道線誘致>

③東海道線街道筋誘致を請願し、実現を果たす。

藤枝・見付間の東海道線敷設計画は、海岸線を通るルートに決定していた。街道筋が寂れることを危惧した山崎千三郎、河井重蔵達は反対運動を起こし、自ら乗降客・産物輸送等の予測を实地踏査した。既に街道筋には、警察署・郡役所等の諸施設が置かれていて街道筋敷設の方が国益に叶うことを、金原明善たちも加わって、各街道筋の有力者や住民の賛同を得て請願した。

政府も再調査した結果、最終的に街道筋敷設を決定した。この区間の完成によって、明治22年東海道線は全線開通した。



<青田坂隧道>

④青田坂改修、隧道建設を働きかけ、掛川と南部との流通を容易にする。

青田坂はそれまでは、登りきるまでに、三喫したという急峻な地であった。東海道線開通後、各地の物流の需要が高まって来た。掛川と南部の交通の障害となっていた青田坂の改修の必要性を感じ、掛川町の山崎千三郎、上張村の河井重蔵、上内田村の角皆七郎平らが中心になって、道路の拡幅、隧道建設を働きかけた。隧道は明治28年開通し、現在も旧青田坂隧道として使用されている。



<南郷尋常小学校>

⑤南郷尋常小学校を建設する。

各村の何度かの合併・離反ののち、最後には上張と杉谷の二村だけになった。この当時南郷村には小学校はなく、学校建設は急務の事業だった。河井重蔵を初め村長が中心となってその先頭に立った。戸数も少なく財政力の乏しい村であったが、何とか経費を捻出し、労力は村民総出の協力で建設を進めた。その結果、明治33年南郷村立尋常小学校は完成した。

その他、掛川～森間の道路整備、現在の天竜浜名湖鉄道の前進となる掛川鉄道敷設計画申請（当時は却下されたが）など、地域振興に大きな足跡を残した。

政治家として

県政・国政に関わる中、県知事の横暴を糾弾し、県政のやり方について「静岡県政匡正の議に付請願」を衆参議長に提出するなど、不正を嫌った。また鉱毒問題に関心をもち、足尾鉱毒事件で天皇に直訴した田中正造と親交を持つ。現在浜松市佐久間の久根鉱山の鉱毒事件では、住民と共に鉱業廃止に取り組んだ。このことを通して田中正造とはより親密な関係を持った。田中は重蔵の国政選挙に、わざわざ駆けつけ応援演説をしている。



明治の掛川を拓いた重蔵達

2018 06 22



<岡田 良一郎>

岡田 良一郎 天保10年（1839）～大正4年（1915）

佐野郡倉真村の大地主である佐平治の長男として生まれる。政治家、報徳運動家。

14歳から4年間余り日光の二宮尊徳のもとで教えを受け、報徳主義を逸州に具現化すべく活動する。

明治8年父の後を継いで遠江国報徳社社長に就任して以来31年間、報徳運動の指導、発展に情熱を傾けた。逸州地方だけでなく、全国各地にある報徳社を一つにまとめて報徳運動の推進の拠点としての「大日本報徳社」を設立する。又、時代を担う地域人材育成のため、邸内に私塾『冀北学舎』を作り教育にも力を注いだ。

政治面では、明治初期、行政制度の改変の著しい時期、浜松県民会、逸州州会議、静岡県民会議長、佐野郡・城東郡長、県会議員を歴任した後、明治23年衆議院議員となる。

実業面では、産業・金融機関に関わる。特に官金取り扱いの必要と殖産振興の見地から金融機関の設置気運が高まり、岡田良一郎が中心となって掛川銀行を設立する。

旧藩時代、藩や城主の御用達を務めた大庄屋などの指導的立場にあり、しかも経済活動に熟達した岡田良一郎、山崎千三郎、松本文二、河井重蔵、鳥井半次郎等の人々の資金を結集して新設に当たった。

掛川信用金庫の前身、掛川信用組合の設立にも関わり組合長も歴任した。



<山崎 千三郎>

山崎 千三郎 安政3年（1856）～明治29年（1896）

掛川宿西町、六代目万右衛門の三男に生まれる。

15歳で家督を継ぎ、明治初年から掛川宿戸長となる。

山崎家は掛川藩や横須賀藩などの御用金を用意するほどの商家であった。明治維新後は、旧藩に貸した金で山林や田畑に替え、所有する山林は三方原、大井川上流、天城山にも及び、県下屈指の資産家となる。

明治22年から6年間掛川町南郷村組合長を務め、地域の産業発展に尽くす。特に茶産業振興のため、製茶工場を横浜に作り、海外に輸出する。後には清水港からも掛川茶を輸出するなどした。それに必要な資金需要のため、同志と図り多額の出資もして掛川銀行を創設し、初代頭取となる。明治19年東海道線敷設計画海岸線案が出ると、藤枝～見付（磐田市）の有力者に働きかけ、地方開発の重要性を説き県・国に上告した。その結果現在の路線となる。

上内田村と南郷村をつなぐ青田トンネル開通事業にもその中心的な働きをする。明治22年には、私費を投じて掛川～森間の道路整備を行い、鉄道馬車を走らせた。

又、生前中には実現を見なかったが、現在の天竜浜名湖鉄道の前身、掛川鉄道設立を計画したり、水不足の掛川のために、大井川から用水を引く計画を立て測量まで行った。

千三郎は地域の振興・発展のために、数々の事業に取り組んだが、明治29年41歳の若さで病に倒れた。

山崎家は明治11年の天皇御巡幸の折、行在所となり宿泊所にもなった。

弥八庵



【入口付近（東側より）】



【床の間（南側より）】



【表札：原 朱色 書】

弥八庵

旧河井邸跡地にあった、離れ家の耐震補強工事が、令和3年8月20日に完了し、開所式が10月3日に行われました。

新名称は、皆様に募集したところ、『弥八庵』と決定しました。

今後は、南郷地区民の憩いの場、学びの場として活用していただければと思います。

「弥八庵」は、明治27年に、河井弥八氏の父重蔵氏により建立された建物です。

重蔵氏は、この離れ家を主に「客間」として利用し、弥八氏は、議員活動の地元拠点と書斎として利用されていました。

【当HP 河井弥八詳細 No.29】を参照して下さい。

尚、弥八庵を利用される方は、南郷学習センター事務室（電話：0537-23-0324）へ連絡して下さい。